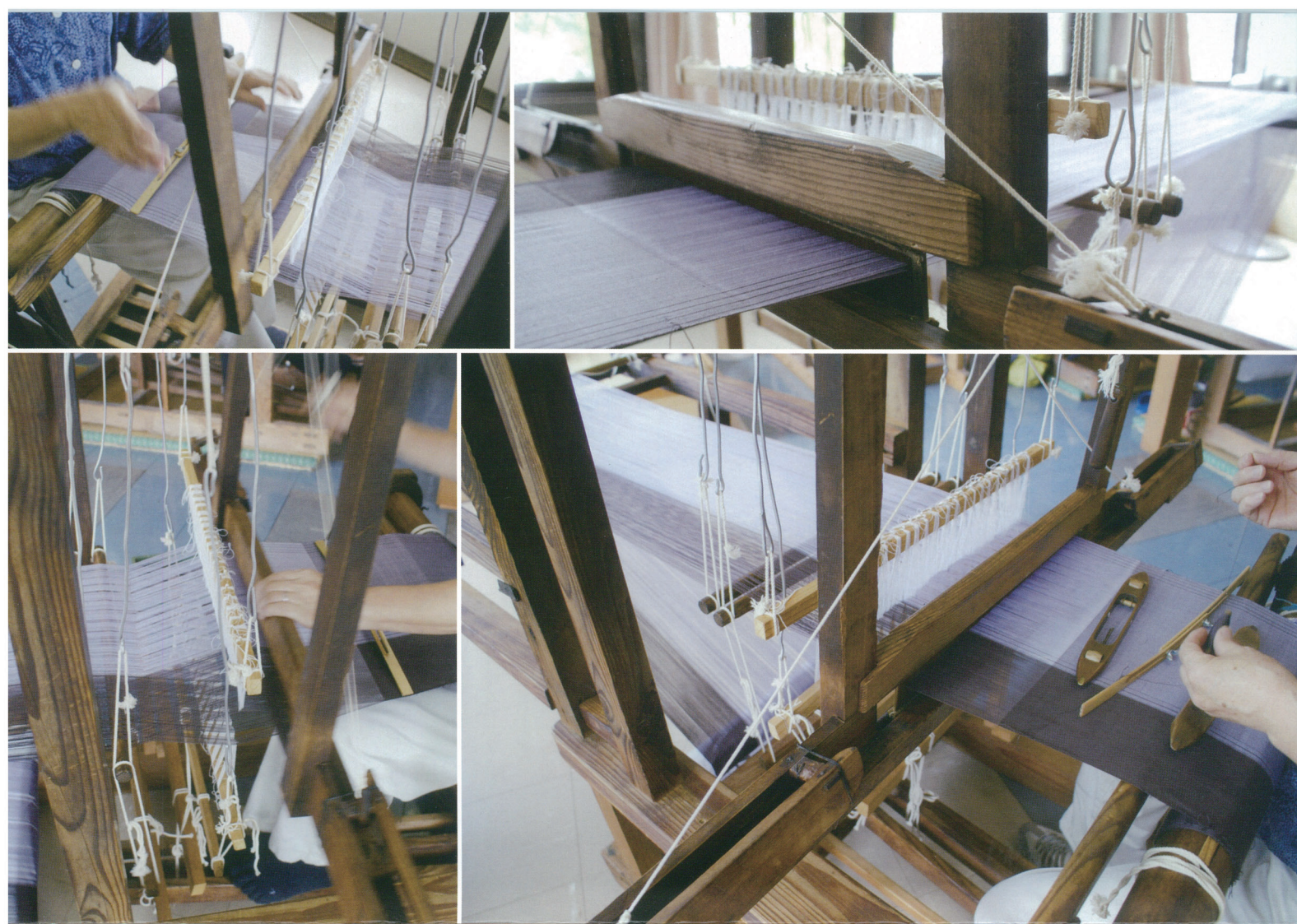




ぐんま絹遺産登録 高崎地域の養蚕・製糸・機織資料

入館無料

高崎市歴史民俗資料館
継承された機織り技術

高崎市歴史民俗資料館 継承された機織り技術

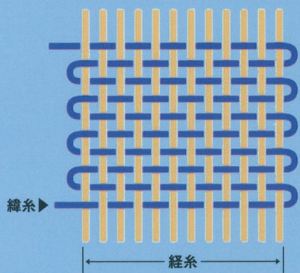
かつて、高崎市内には日常的に機織り機を使い、家で機織りをする暮らしがありました。機織り技術は女性から女性へと受け継がれてきたものです。この昔ながらの機織りが、高崎市歴史民俗資料館の所在する上滝町には40年ほど前まで奇跡的に伝えられていたことから、当館でこの技術を継承し、保存することができました。

◆ 高崎市歴史民俗資料館の機織り

当館1階の「はたおりの部屋」では、高機による実演と技術の保存を行っています。この活動は、昭和57年にご自身の高機を寄贈された上滝町の江原トヨ（1910-2005）さんの指導で機織り教室が始まったのがきっかけです。平成6年からは実演活動が始まり、平成8年には機織り伝承者の育成や小中学生を対象にした機織り体験教室を実施しました。平成11年、江原さんは永年にわたる機織り技術の実演及び指導への功績が評価され、高崎市文化財保護賞を受賞されました。現在は、江原さんの技術を受け継いだ6名のボランティアの皆さんの協力で、大正時代頃につくられた機織り機を使って、機織り技術を保存しています。なお、使用する道具の名称や作業は、当館で継承した用語です。

◆ 織物 かむもの

織物は、縦方向に平行に並んだ「経糸」と、水平方向に往復しながら経糸の間を走る「緯糸」の2方向の糸で構成されています。この経糸と緯糸の組合せによって、さまざまな柄の織物ができます。



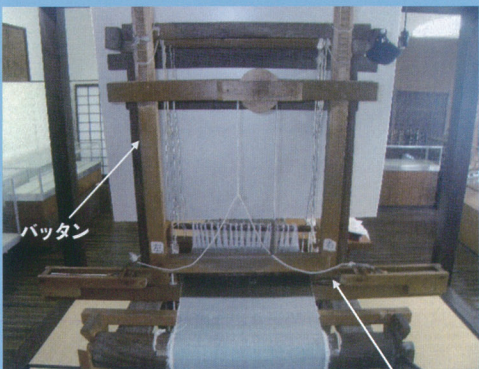
◆ 高機 たかばた

機織り機に腰掛けて作業ができる機織り機です。緯糸を通す隙間を作るために、経糸を上下に引く「綜統」という仕組みがついていて、綜統を足元の踏み木につないだ足踏み式の装置です。経糸が機織り機に固定され、糸の張りが均一であるために、安定した状態で織ることができます。「高機」は、江戸初期に登場した綿布用の「地機」に、幕末頃に「バタン」という装置が取り付けられて画期的に進化しました。また、機織り機に腰かけた楽な姿勢で作業できるようになったことから、機織りの能率が向上しました。県内では、享保15年（1730）に京都の西陣が大火に見舞われた際に、焼け出された職人の一部が桐生にやってきて高機が導入されたといわれています。



◆ バタン

経糸を整えるための「成」という道具を木枠に固定して機織り機に掛け、プランコのように揺動させて経糸にしっかりと打ち込む装置です。このバタンに1733年イギリスのジョン・ケイが、緯糸を載せた「飛び杼」を飛ばすために成の両端に箱（杼箱）を取り付けました。この中に入れた杼をヒモで引いて、杼箱を移動させながら緯糸を瞬時に弾き飛ばし、経糸の間を通る仕組みです。従来の「板杼」は、手から手へ杼を受け渡して緯糸を通していましたが、この飛び杼の発明によって生産性が著しく向上し、広幅の布も織れるようになりました。日本では、明治6年（1873）12月に京都府から派遣された織物伝習生の佐倉常七らがフランスのリヨンからジャガード機などと共に持ち帰り、翌年、京都市河原町の織殿で試用したのが最初です。



飛び杼(とびひ)



Ⅳ 綜統 (そうこう)

そうこう

綜統を作る

織るときに上糸を上方に持ち上げ、下糸を下方に引くために木綿の掛け糸で吊る。片方が吊れたら、裏返してもう片方も同様に吊る。上下に吊った糸をそれぞれ角棒に移し変える。



そうこう

綜統 どんな高機にも箴と綜統という部品があり、すべての経糸はこの2か所を通っている。綜統は、踏み木を踏んで経糸を上下に分け、緯糸を通すための隙間をつくる道具。

糸綜統 綜統には糸綜統と金綜統(ワイヤー)がある。糸綜統は糸を手でつり、金綜統より古い方法である。金綜統では綜統通しという道具を使って金具の穴に糸を通す。当館は糸綜統で行っており、絹を織るのに当たりが軟らかいと伝えられている。

V 杼 (ひ)

くだ

管を巻く

緯糸を紡錘型になるように管に巻き、杼にセットする。



杼 英語ではシャトルといい、経糸に緯糸を渡すために考え出された。飛び杼と板杼などがあるが、飛び杼には緯糸を渡す杼に車が付けられ、連動するヒモを引くと経糸の間を瞬でくぐり抜ける。

緯 緯糸のこと。経糸が織物のタテになる糸であるのに対して、経糸に直角に織り込まれるヨコ方向の糸で、「抜き糸」とも呼ばれる。経糸とは異なり、通常は長さをそろえることはなく、織っている途中で切れても、別の糸をつないだり差し替えたりすることができる。強く張る経糸より、燃りの甘い糸が使われる。裂織では、布をヒモ状に裂いたものが緯糸に使われる。

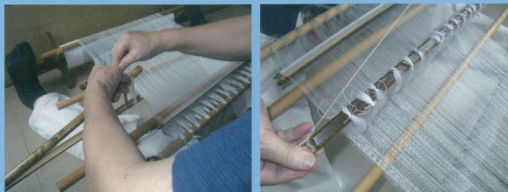
Ⅵ 織る (おる)

1 もう一度綾を機織り機の後方に移動する【元綾】

2 機に取り付ける

経糸を巻いた男巻棒を取り付け、箴をボタンに装置する。機織り機の踏み木に綜統を結び付け、足で踏んで上下できるようにする。

3 織り出す



I 経る (へる)



当館の機織り機には、一反の着物をつくるのに必要な13mの経糸を張ります。その下準備となる糸を「経る」作業は、機織りの一連の作業の中でも特に慎重に行います。

1 木杵に糸を落とす

「**総**」を「**総かけ**」に掛け、1つの木杵に経糸に必要な長さだけ巻いて18杵用意する。
総 糸の取り扱いが便利のように、一定の大きさの杵に糸を巻いて束にしたもの。
総かけ ふわり・トンボ・五光ともいう。総状の織糸を木杵に巻き取るときに使用する道具。

2 整経

① 経台(整経台)の下に糸を巻いた木杵を18杵並べ、台の両端に直角に立てた数本の棒の端から端へと何度も往復して糸を掛けながら、必要な長さや目数を計算し経糸を用意する。

② 糸を1本1本交差させて「**綾**」を作り、経台下方の1本の棒に集めておく。

③ 整経台から糸を外し、鎖編みにして長さを短くし、糸を扱い易くする。



経る 経糸の準備を「**整経**」または「**経る**」といいます。経糸の長さを揃え、必要な本数を順序良く並べるために、「**経台整経台**」を使う。当館の経台の幅は約170cm。経糸13m分×上下2本分の糸=約26m

綾を取る 糸を交差させて「**×**」を作ることを「**綾を取る**」といい、綾を取ることで糸の並び順が決まる。糸が切れたり、乱れたりしても糸の順番が判らなくなることがない。伝承では箴目を「ヨミ」と呼び、例えば「10ヨミ(とよみ)」などという。

Ⅱ 箴 (おさ)

おさとお

箴通し

経台から外した経糸を1束にし、綾がなくなるように、綾の両側に棒を通す。経糸の束から糸を1本ずつ導き出し、順番に箴通しという道具で箴に通して糸を棒に掛けておく。

箴 竹製の櫛の歯状の板で、経糸同士がくっつかないように歯の間に経糸を通す。上下に分け経糸の隙間を通った緯糸をボタンに固定された箴でトントン叩いて経糸に打ち込む。



Ⅲ 男巻 (おまき)



「はたぐさ」を入れながら経糸を「男巻」に巻き取ります。

はたぐさ 経糸を男巻に巻き取るときに、糸が均一に巻けるようにはさみ込む紙。当館では蚕の種紙もはたぐさに使っている。

1 綾を移動する

綾の間にはさんだ棒の位置を箴の向こう側に移動して目ごしらえの経糸を結びやすいようにする。

2 目ごしらえ

織り始めの糸の始末をする。男巻に巻いた経糸が同じ長さになるように結ぶ。



高崎市歴史民俗資料館
開館時間…午前9時～午後4時
休館日…月曜日・祝日の翌日

〒370-0027 群馬県高崎市上滝町1058
Tel・Fax:027(352)1261 E-mail:rekimin@city.takasaki.gunma.jp
http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2013121900362/

- ① JR高崎駅西口(群馬中央バス) 県立女子大行き約30分「慈眼寺裏」下車徒歩3分
- ② JR高崎駅東口(群馬バス) 日赤病院行き約20分「下滝西」下車徒歩8分
- ③ JR高崎駅東口(ぐるりん) 群馬の森駅「滝川郵便局入口」下車徒歩15分
- ④ 関越自動車道(高崎 IC)5分
- ⑤ 関越自動車道(高崎玉村スマート IC)3分
- ⑥ 北関東自動車道(前橋南 IC)5分

駐車場:大型車3台/普通車20台